

# 高等学校生徒の学習意欲を高めるための 暗示効果の一考察

山 崎 一 雄

(教育相談部)

## 1. はじめに

近ごろ、高等学校の生徒で、「どうも、授業がよくわからないので、授業についていけない。」と、相談に来所する者がいる。こんな生徒に、知能検査を実施すると、結果は正常の範囲におさまっている。とすれば、この生徒は、わかろうと努力し、なまけているわけでもないことがうかがえる。

このような生徒を、簡単に「学習意欲がないからだ。」と、きめつけてよいだろうか。

そもそも、「意欲」は、興味もしくは必要感、ないしは両者に迫られた時に、強力にわいてくるものである。

学校において、教科学習に全く意欲をもやさない生徒でも、放課後の部活動に熱心であったりする場合が見られるが、教科学習は、部活動などとはちがいが、必ずしも、生徒の興味・必要感のみに基づいて行われているものではない。そこで、学習意欲の問題を考える場合、表面的な現象に視点をあてるのではなく、内面的な掘りさげが必要になってくる。すなわち、学習意欲の背景になっている種々の事柄を総合的に考察し、対策を考えなければならないと考える。

本研究は、学習意欲について、心理学的見地から考察を加えるとともに、それを応用し、わかる授業の設計をこころみたものである。この研究のなかから、生徒側の「おちこぼれ」が問題として問われていると、短絡的に考えずに、教師側による「落ちこぼし」もあることを考えていただければ幸いである。

## 2. 学習意欲とは

国語的な解釈として、学習意欲を広辞苑で調べてみると、「学習に対して積極的に何かをしようとする気持ち」、「種々の動機の中から、ひとつを選択して、これを目標とする能動的意志活動」と出ている。

また、教育学大事典によれば、「学習活動を喚起し、持続させ、方向づけ、強化する機能の背後に想定される行動傾向を意味する」と出ている。

さらに、心理学的見地から、教育心理学小辞典で調べてみると、「学習者自身が意志的・自発的に学習活動を求めようとする働き」と出ている。

以上のことから、共通していえることは、自らの力で積極的に事態に立ち向かい、真剣に問題に取り組む時に起こるものであるということである。

従って、学習意欲を、「学習しようとする動機（欲求）を選択し、それを実現しようとする心の働き」とおさえない。

この学習意欲を向上させるためには、教師の教育的配慮と、創意が発揮されなければならないと考える。教師は、生徒の自発性・必要感・経験などを重視しながら、そのうえに、適正な動機づけによって、一段高い概念を学習させ、更に、一度確立された概念を新しい基礎として、より高次の概念へと導いていくという、スパイラル方式が、生徒に対して、一步一步の高まりを自覚させ、もっと学びたい、やりたいという気持ちに発展させていくものである。

## 3. 学習意欲欠如の原因

教師は、授業に臨む場合、当然のことながら、